



町長コラム

Vol.18

## とびらをあけて

九重町長 日野 康志

新型コロナウイルス感染症のワクチン接種も、希望者全員の集団接種がこの9月をもって終了しました。玖珠郡医師会の皆さん、看護師の皆さん、臨時に携わってくださった住民の皆さんなど、多くの関係者のご協力を頂き、無事に終了することが出来ました。心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

また、接種された住民の皆さんから、感謝の気持ちを伝えて頂き、職員も私も安堵しています。今後も、3回目の接種が必要となるかもしれませんが、皆さんのご協力も頂きながら現場の実態に沿えるような対策を講じていきますので、宜しくお願いします。尚、個別接種の希望者につきましては、10月も引き続き町内4か所の病院で受けられる事を申し添えておきます。

また、昨年7月の豪雨災害や本年8月の集中豪雨や台風等の影響で災害に見舞われた皆さん、感染症の影響で観光業や飲食店などを始め多くの産業で被害に遭われた皆さんなど、多くの住民が大変な時代を迎えております。その影響だけではありませんが、行政に携わる私たちも、感染症対策と経済政策の両立、並行して通常業務を進めなければならず、大変な時代を迎えています。人口減少も然りです。

しかし、こんな時代だからこそ『共』という言葉が大切だと感じています。人間一人で出来る事などありません。いつも、どんな時でも、人と人が支え合っているから、生きられるのです。苦難にも耐えられることが出来るのです。企業も自治体も政府も家族も人も目的はそれぞれですし、方法もそれぞれですが、すべて人の支え合いで成り立っています。当たり前すぎる、皆さんに笑われるかもしれませんが、常に「共存 共栄」を念頭に置きながら、行政運営を心掛けて参ります。

最後に一言、波は常に上がったり下がったりします。良い時もあれば、悪い時もあります。今は悪い時かもしれませんが、未来が良くなる様に今努力しておかなければなりません。次回は、温かい明るい話を書きたいと思っておりますので、またご覧ください。



## シリーズ『障がい福祉』(72)

## のうふくれんけい 農福連携っち、知っちょる? -農業と福祉がつながる-

●お問い合わせ 健康福祉課 ☎76-3821

人口減少や過疎化が進むいま、多様な人材活用が求められています。高齢化や担い手不足に悩む「農業」と、社会参加や働く場を確保したい「福祉」がつながり、それぞれの課題を一緒に解決していく取組を「農福連携」といいます。



全国各地でこうした取組が広がっており、障がいのある方々が農業や林業の現場で活躍しています。九重町でも昨年からの農福連携の取組を開始し、現在は大分県社会福祉事業団が運営する障がい福祉サービス(就労訓練事業)の一つとして、東飯田地区にあるビニールハウスを農家さんからお借りし、農家さんから直接指導を受けながらピーマンの栽培・JAへの出荷を行っています。他にもブルーベリー農園の収穫・出荷作業を担うなど、地域と密接に関わり合いながら障がいのある方の働く喜びと自立に向けて農福連携の取組を進めています。



## 幸せになろうね



No.302

昨年の8月に文部科学大臣より、保護者や地域の皆様へ、「新型コロナウイルス感染者への差別をなくすお願い」が出されました。

お願いでは、第一に、「感染者に対する差別や偏見、誹謗中傷等を許さない」ということ、第二に、「学校における感染症対策と教育活動の両立に対する理解」を求めるものでした。

しかし、このお願いが出された以降も感染者への誹謗中傷は止むことなく、全国各地で感染者への『口撃』、学校や会社へのクレーム、個人宅ポストへの文書投函、落書きや大分県内でもクラスターの発生した学校の生徒へ登校中に暴言を浴びせるなど感染した方を苦しめる様々な行為が行われております。

先日、大分県内のニュースで新型コロナウイルスに感染したご夫婦の話がありました。このご夫婦は飲食店の経営をされていますが、二人で感染し、店の休業をやむなくされました。

感染したことにより、今後の店の運営や周囲の人からどんなことを言われるのだろうと大きな不安がありました。しかし、予想に反し、常連さんや周りの方から体の心配や大きな励ましがあり、安堵したそうです。この常連さんや周囲の方のような「気遣い」ができる方が増えると良いと思います。

誰もが新型コロナウイルスに感染する可能性があります。感染した人を責めるのではなく、感染対策を徹底し、更なる感染を防ぐことが大切です。感染を責めれば、医療機関での受診をしなかったり、感染を隠したり、地域での感染の拡大にもつながります。自分が差別を行わないことだけでなく、周りに差別につながる発言や行動があったときには、それに同調せず否定するなど、様々な差別をなくす努力が必要です。 教育振興課

●人権に関する相談は、九重町隣保館へ (☎0973-76-2468)

## ふるさとの文化財探訪 第90回

### ひとやきば(火葬場)

文化財調査員 後藤 浩二

幼い頃、こんな夢を見ました。集落の終わりに小道があり、山に続いています。幼い私はその先に入った事が無かったのですが、夢の中の私は踏み込んでいました。

やがて大きな滝があり、所々赤い、さまざまな匂いのする河原が広がりました。そして白い服を着、髭をたくわえた老人が「こっちに来るな」と怒鳴っていました。

私は恐怖で、目を覚ましました。それから数十年後、友人から、そこは昔、ひとやきばだったと知らされます。ひとやきばとは、今の火葬場のことです。火葬場は昭和27年くらいまで、使われていたそうです。

今はもう草木が生え、当時の様子をうかがう事は出来ません。古老の話では、整備された道の下に石が敷き詰められており、その上で人が焼かれたそうです。

地区クラブには棺桶をはじめ、葬儀の道具が用意されていました。不幸があると、その都度手直して、近隣地域で利用していたそうです。

葬儀の時は、玄関に竹を組んだ門を作り、忌の紙をはります。座では祭壇を組み篠竹に紙で作った菊をつけ、それに灯籠を下げ、横にたいまつと蠟燭を立て、これを数本用意し、葬儀を迎えたそうです。

又、この地蔵尊は、地元のものから「歯が痛いとき、大豆をお供えて祈願をすると、ご利益がある」と伝えられており、さらなる調査を続けたいと思っております。



地藏さま

その火葬場に向かう道に地蔵さまと呼ばれる古い石造物があります。見たところ六地藏の様ですが、劣化が進んでおり、銘などは確認できません。

六地藏は、六道輪廻(地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人道、天道)を守護する地蔵尊で、葬儀場や墓地など他界への旅立ちの場に建てられる事が多くあります。最後のお別れの道のりに、冥福を祈って建てられたのでは、ないでしょうか。

葬儀がビジネスになり、形態が大きく変わった昨今ですが、今に残る、このじゆんのシステムが、当時いかに大切な役目を果たしていたか、考えさせられます。

そして、たいまつを持ち、灯籠を下げ、火葬場までの道を進みました。